

学年末「たのしい会」のもち方



清水エミ子

「もうすぐ〇〇組(年長組)になるんだね。やんなっちゃうな、小さな組の子に世話やかされるね」

「さあたいへんだよ。いそがしくなる」

ついこの間まで年長組に世話をやかせていた年少児たちが、三学期も終るところになると、なまいきなことを友だちというようになりまます。そして、わたしちもまげずにやるぞ、と意気こんでいるようですが、現われるようになってきます。

「一年生になると、こんどどこに遠足に行くのかな。学校の先生はきつとむずかしい問題をだすね」

「わかんなかったらやだなあー」

「うりやさんごっこやった時、ひろし君のうりやさん、おもしろかったね。大声をだしてさ」

「ねずみとねこやって、しげる君とよしえちゃんなかなか勝負がつかなかったのね」
など年長児たちは、保育者のリードで楽しかった幼稚園(保育園)生活をなつかしく

ふりかえりながら、次に待ち受けている小学校生活に、不安と期待のいりまじった気持ちを持っているようです。

このように、三月の子どもたちの状態をみつめると、それぞれが、ふくぎつな期待で満たされているなかにも、何か落着かない、不安定な気持ちもあるようです。

このような状態の子どもたちと、学年のしめくりとしての活動を、どのように展開していったらよいのでしょうか。一年の、そして二年の集団生活のしめくりとして、すべての保育者は、楽しい活動をして、思い出にとどめたい、と考えるのではないのでしょうか。幼児たちが楽しい会だったと感じ喜ぶ会とはいったいどんな会なのでしょう。私は毎年、こんなことを、三学期も終りに近づく頃になると考えるのです。

私たち保育者は子どもたちにあたえる活動を概念的に考えてしまつて、子どもたちののぞまないものをあたえてしまひ苦しめてしまつていのではないのでしょうか。

よく行なわれる活動のひとつに「たのしい会」というのがあります。この活動で学年の終りをしめくくるのです。(ひなまつり会、遊び会、学芸会、お別れ会、進級会など)その表現の仕方はそれぞれことなるのですが、展開される内容は似かよっています。その大まかなちがいを考えてみると、

ねらいのちがい

◎ステージの上から大人や友だちに見せるためのショー的にまとまったものをする。

(お遊び会、ひなまつり会)

◎ステージの上でするが、友だちどうしでやったりみたりしてたのしむものをする。

(お別れ会、ひなまつり会)

◎子どもたちが主体だが、その中に母親もなかまいりできるものも含められるようなものをする。

◎ホールなどで自然の型でたのしい遊びをする。(年長児を送る会)

◎学級だけの学年のまとめの会をする。(ひなまつり誕生会、年少組さよなら会、

幼稚園さよなら会)などがあるようです。

このように「ねらい」や「型式」によって少しずつ内容にちがいがあることがわかります。私は、このどれひとつをとって、いけないものはないと思いますし、それぞれに意図するものがあると思うのです。しかし、もう少し子どもの状態や活動のねらいを、ほりさげて考えてみると、これらの一連の活動の中で、ちがってはいかない、根本的なものがあるのではないかと反省させられるのです。それは、

この活動で、子どもたちに何を考えさせ、何をあたえ、何をさせるのかということなのです。

子どもの可能性のどの部分を、どのような型でひきだし、育てのばすかということだと思ふのです。

保育者がこのことをしっかりふまえて、子どもといっしょに計画し展開していかなければ、子どもたちには、ただ大変だった、むずかしかったなどの苦しみが残るだ

けになってしまふのではないだろうか。

◎計画にむりのないこと、やる方もみてる方も疲れたり苦痛を感じたりしないようにする。

◎大人からあたえる計画でなく、子どもたち自身が計画したものにする。

◎学級又は学年、園全体の対象の幼児全員が興味のある楽しいものであり、誰でも参加できるもので、程度の高すぎないものにする。

◎参加することによって自分の持ち味を發揮し、友だちの持ち味も知ることができるようにする。

◎会や活動のはじめから終りまで(その計画、流れ、展開、まとめ)をはっきりわかるよう(認識できるよう)ひとつひとつたしかめながら展開する。

これらのことを保育者は心して子どもたちの前に糸口をなげかけてみてはどうでしょうか。

①年少児に

◎新入園児を迎える会のために（一日入園のためなど）「もうすぐ皆さんは大きい組になりますね。小さいお友だちに幼稚園はみんなで遊んだり仕事をしたりするところ
で、とってもたのしいのよって知らせてあげる会を考えてやってみましょう。そして
みせてあげて下さいな」と呼びかけたり
◎「年長組のお兄さんお姉さんともうすぐお別れだからお別れの会に何かしてみせてあげましょう」などと呼びかけてみます。
この時一年間に経験したことの大半が加わるように保育者はかげでみちびきます。
◎おまねきのお知らせをだす。プログラムやことばは保育者が印刷し、きれいな招待状を作ります。

ーム遊びなど大きくても小さくてもつなげていけるようなかたまりにしていけるように（ミュージカルのようなものに）子どもたちの作るストーリーの表現に変化をつけさせるようにしてみます。（動物村の幼稚園、春がきましたなど）一年間の思い出や、子どもたちの物語をそれぞれの特技でうめていくようにするのです。
◎人形げきで、入園当所のけんかの場面を
◎楽器遊びで、えんそくや音楽会を
◎カミシバイで、創作童話やエピソードを
◎保育者とリズム遊びやげき遊びで、呼びかけを、といったように進めて行ってはどうでしょう。このひとつひとつの結びには、リーダーの幼児の解説や、ゲーム遊びなどを折りこんでいくと、おどろくほどスムーズに会が流れていくようです。（年少組年長組がいっしょになってする時には、分担をきめて行なえばよいようです）

◎こんないろいろなことができるようになります
「もうすぐ小学生ですね。幼稚園でずい分いろいろなことをしてのしみましたね。
みんな友だちと力を合わせていろいろなことができるようになりましたね。どんなことができるようになったか、たのしい会をしてみせっこしましよ。とくいなものをなかよしの友だちと計画して発表させて下さい」と呼び掛けます。少し時間をたっぷりかけて小グループでまとまったものができるように導きましょう。
◎大好きだったお話や紙芝居を、かげ絵にしてみる。
◎大きな紙に、創作の絵話を作って描く。
◎いちばん思い出のこっていることを、等身大のペーパーサートにやってみる。
◎みんなで作ったうたをうたったり楽器でえんそうしてみたりする。

◎お話も、リズム遊びも、げき遊びも、ゲ

◎小学生になるため、幼稚園お別れの会

◎短い、ごっこ遊び（幼稚園ごっこや乗物ごっこ、買い物ごっこ）をリズムカルに仕

②年長組

組でリズムカル表現遊びにする。(この時、母親や保育者も参加してもよい)

◎げき遊びをする。

これらの立案から準備、練習まで子どもたちにまかせてやらせてみる。保育者は材料や環境をととのえ、かげの応援者になるよう、ひとりひとりの進度をしっかりと把握するようにしないと、脱落者がでてしまうので注意したいものです。練習をするさい、それぞれのグループでみせあい、友だちの意見をとり入れてなおしていけるよう、助言していきます。

それぞれのグループがまとまってきた時、プログラム作りをします。この時、何の次に何をした方が、準備都合でよいのではないか、似ているものがくつついていないほうが、楽しいのではないかなどいろいろのことを気づかせながら、プログラムを作ります。

司会者や、お客さまの接待なども、だれがいつ何でどうしたらよいかなど、会の上

あげの相談をします。

プログラム

はじめのことは

しかいしや

・園長先生のお話

・たのしいフォークダンス

・人形しばい

・ゆうぎ

・お母さんのうた

・かげ絵

・先生方のげき

・えばなし

・楽器あそび

・ごっこ遊び

・うたとゲーム

・ベープサート

・お母さんとみんな

しりとりのうたがっせん

・おわりのことば

・おれいのことば

○○組○○○○

○○○○

○○グループ

○○グループ

○○グループ

○○グループ

お母さん

○○グループ

せんせい方

○○グループ

○○グループ

○○グループ

○○グループ

○○グループ

みんな

○○組○○○○

年少組○○○○

以上のように紙面の都合で、具体例を示して計画・展開を考えていくことができず、ざんねんなのですが、要は

「たのしい会」は字でかくだけのものではなく、口でいうだけのものではなく、子どもたちひとりひとりの心に残るたのしい会であって、なくてはならないと思うのです。

◎大人の作りあげたものも、さるまねさせるのではなく

◎美しく着かざる(いしょう)ことにあくせくするのではなく

そぼくな、たのしい会でありたいのです。ふだんの園服に、手作りのオメンやかんむり、小道具、でたくさんです。そのひとつひとつに幼児ひとりひとりの心がかよ

い、汗がにじんでいればよいのではないでしょう。そしてこの会が、それぞれの幼児のこれからの出発の土台石になるきっかけになって、前進していけば、この活動のねらいは十分に達成されたのではないでしょう。 (足立区立関屋幼稚園)